

# エミール・ゲオルク・ビュールレの生涯とビュールレ・コレクション

Emil Georg Bührle's life and Bührle Collection

1890年8月31日

ドイツ南西部のプフォルツハイムに生まれる。

1909年～1911年

フライブルク・イム・ブライスガウにある国立アルベルト・ルートヴィヒ大学で、文学、哲学、美術史を学ぶ。

1920年

銀行家の娘、シャルロッテ・シャルクと結婚。

1924年～1929年

義父が有するマクデブルク・工作機械社が買収したスイス工作機械社エルリコーンの再建のため、チューリヒに移る。

1930年～1939年

1937年にエルリコーン・ビュールレ工作機械社のオーナーとなる。同年にスイス国籍を得て、一家とともにゾリカー通りにある邸宅に引っ越す。その邸宅に飾るため、美術品の購入を始める。購入作品には、コロラバルビゾン派の画家、モネ、ピサロ、ルノワール、シスレーなどの印象派の画家の作品が含まれていた。

1939年～1945年

19世紀のフランスの画家の絵画を中心におよそ80点を購入。

1945年～1951年

1945年にレンブラントの自画像を購入するが、後に贋作と発覚する。

1948年にスイス連邦裁判所は、スイスの同盟国によって確認された77点の略奪作品が国際法違反であるとし、返却を命じる。ビュールレの所蔵品の中では13作品が該当したが、裁判所はビュールレがそれらの作品を入手した際、フランスで略奪されたものであることを知りえなかったと認める。ビュールレは13作品のうち9作品をそれぞれの所蔵家から正当に買い戻す（その所蔵家のうちの



エミール・ゲオルク・ビュールレ。1950年頃  
Photo: Foundation E.G. Bührle Collection, Zurich (Switzerland)

1人が画商のポール・ローザンベールで、後にビュールレの作品収集に多大な影響を与える)。ファン・ゴッホの自画像を購入したが、贋作と発覚。その後、購入作品の所有歴の情報管理をする秘書を雇う。

1951年～1956年

事業を拡大し、成功をおさめる。度重なる渡航で、ニューヨーク、ロンドン、パリなどの画商たちから作品を購入する。特にロンドンのアルトゥール・カウフマンと、チューリヒのフリッツ・ナタンと信頼関係を築く。

1954年に、チューリヒ大学で、「私のコレクションの成り立ちについて」と題し、自身の所蔵品を美術史的観点に沿って講義を行う。同年、ビュールレの財政支援によって、チューリヒ美術館の拡張工事が始まる。

1956年11月28日

チューリヒで没（66歳）。

1960年2月24日

ビュールレの妻 シャルロッテ・ビュールレ＝シャルク、息子 ディーター・ビュールレ、娘 オルタンス・アンダ＝ビュールレがチューリヒにE.G.ビュールレ・コレクション財団を設立。所蔵品の3分の1（絵画167点、彫刻31点）を財団に移管。財団のコレクションは、ビュールレのチューリヒの邸宅に隣接する、所蔵品の保管場所として使用していた別棟に展示され、同年4月にプライベート美術館として一般公開。



一般公開されていたビュールレ・コレクションの美術館。2015年に閉館

1990年～1991年

ビュールレの生誕100年を記念し、ワシントン、モントリオール、横浜、ロンドンでコレクションの世界巡回展が開催される。

2008年2月10日

セザンヌの《赤いチョッキの少年》、ドガの《リュドヴィック・ルピック伯爵とその娘たち》、モネの《ヴェトウイユ近郊のヒナゲシ畑》、ファン・ゴッホ

の《花咲くマロニエの枝》が武装強盗団によって盗まれる。モネとファン・ゴッホの2点はすぐに近くの駐車場で発見されるが、セザンヌとドガの2点は2012年までに発見。以降、プライベート美術館の一般公開が規制される。

2012年

ビュールレ・コレクションが2020年に完成するチューリヒ美術館の新館に常設展示されることが決定する。



エドガー・ドガ

《ピアノの前のカミュ夫人》(1869年)

カミュ夫人は、ドガの治療にあたった眼科医の妻であり、友人でした。本作品では、彼女がピアノの演奏をやめこちらを振り返った瞬間の様子が捉えられ、彼女を振り向かせた張本人であろうドガと、観者である私たちの視線が重なり合います。洗礼された家具や調度品のある室内は、モデルが属する社会階級の高さを示しています。